

教育機関での20年を振り返って

増 田 悦 夫

私は、2002年4月、大学院物流情報学研究科博士後期課程の開設に伴い、本学にお世話になりました。電話サービスを主に提供する企業の研究開発機関から大学という教育機関へ鞍替えしました。当初は多少の不安もございましたが、お陰様で今日に至るまで充実した20年間を送らせていただきました。関係された皆様に感謝しかございません。

本学においてこれまで多くの先生方と入試業務を始め様々な学務において学部学科の壁を越えてご一緒させていただきました。大学としての同じベクトルに向かって協力しあいながら対応させていただきました。また洗練された職員さんに支えられて教育・研究活動や各種委員等の活動も行うことができました。さらに私の担当する科目を履修してくれた学生には、彼らの知識をどこまで増やし潜在能力をどこまで引き出すことができたのか分かりませんが、熱心に授業を受けてもらえたことが助けになりました。昨年度までに私のゼミから学士221名、修士36名が巣立ってくれています。細かい課題に直面しつつもこうしたことがここまで長きに亘って続けられた要因であったと思っております。

着任当初は、教育機関での新たな任務である人財の育成をそれまでの装置やシステムの開発とほぼ同じように考えていました。装置やシステムの開発は、機能や性能に関する設計仕様書を作成しそれを基に製造しスペック通りに動作することを確認できたら完了ということになります。世の中へ送り出された装置やシステムは故障しない限り黙っていてもスペック通りに動いてくれます。教育機関における人財育成も同じように考えていました。卒業した後はその人がうまくやってくれると思い、卒業するまでの育成プロセスを機械的にこなすことが役目であるという風に考えていました。大学での教育の場合、設計したカリキュラムに基づく履修要綱が作られますが、この要綱に従って授業を履修してもらい試験に合格したら単位を付与し、その人が問題なく卒業できたらそれで完了という風に考えていました。人間ですから装置やシステムと異なり、卒業してからスペック以上のことをやる人、そうでない人など色々かと思いますが、それは卒業生次第と思っていました。人財の育成方法まであまり深くは意識していませんでした。し

かしながら、晩年の4年間、FD業務を担当させていただき少し改めるようになりました。世の中に出てからスペック以上のことをやってくれるような人を育てるようにしないといけないということです。遅まきながら勉強させていただいた次第です。

流通情報という名の学部へ所属し、着任するまで務めた情報を行きわたらせる「情報流通」という分野の仕事から情報を使ってモノを行きわたらせる「流通情報」という分野の仕事に変わりました。新しい分野への挑戦ということでしたが、どちらも行きわたらせることに共通点もあり、情報流通の観点から流通情報を考えてみたいと思いました。つまみ食いのではありませんでしたが、この分野の話題に食いつかせていただきました。話題も多岐に亘りネタに事欠かない興味深い分野であると感じました。サプライチェーン、ロジスティクスを始め、RFID、オムニチャネル、トレーサビリティ等々、着任していなかったら素通りしていたキーワードかと思っています。新鮮で充実した20年間でした。研究開発経験上がりのエンジニアであるせいか、実証的な研究というよりも物流やロジスティクスの新しい仕組みを考えることに興味がありました。自然と、物流網を情報通信網とのアナロジーで考えていました。最近、人手不足への対応から自動運転車両の導入に向けた取り組みが積極的に進められていますが、物流網が自動運転の車両や自動倉庫などにより人手介在なしの形で運用されるようになった時、情報通信網に近い形で運用できるのではないかと思ったりしました。その場合、情報通信網で融通性に富むデータ伝送方式として知られているATM (Asynchronous Transfer Mode) のやり方が適用できるのではないかと思いました。ATMは回線交換とパケット交換の利点を併せ持った伝送方式で多様なデータを効率よく伝達できる点に特徴があります。まさに多様な荷物を効率よく運ぶために自動運転時代の物流網はATM方式に似たような形態になるのではないかと思ったりした次第です。

流通情報学部へ着任してからの20年を改めて振り返った時、着任時存在しなかった新松戸キャンパスができ、最近、龍ヶ崎キャンパスの2号館が新しくなり、新松戸キャンパスには2号館が新設され、学部の教育の場は新松戸へ移行しつつあります。開設当時から先生方も少なくなり世代交代が進んでいます。しかしながら、ロジスティクスを柱に教育を推進するという方向は今後も続いていくものと思っています。本学部の卒業生がロジスティクス業界を引っ張っていく時代が到来することを期待していますし、必ずそのような時代が来ると確信しています。なお、退職後は、それが最大の社会貢献と思い、アクセル・ブレーキを踏み間違えることなど社会に迷惑をかけることがないように過ごしていきたいと思っております。